青少年国際交流事業事後活動推進大会
日本青年国際交流機構第 28 回全国大会
第 19 回青少年国際交流全国フォーラム　沖縄大会

ふれ合おう　ちむぐくる　深めよう　ゆいま～る

沖縄大会　報告書

平成２４年１２月８日（土）～　９日（日）
会　場：サザンビーチホテル&リゾート
主　催：内閣府
　　日本青年国際交流機構
　　財団法人青少年国際交流推進センター
　　沖縄県青年国際交流機構

目　次

大会要綱 2
御挨拶 3
大会日程 8
開会式 9
基調講演 10
分科会 12
懇親会 24
全国物産展 26
参加者交流会 27
表彰式 28
帰国報告 29
事後活動紹介 30
閉会式 33
地域理解研修 34
空港送迎バス 37
有料託児保育 37
大会報道 38
参加者名簿 39
参加申込状況、参加者のコメント 44
協賛企業・団体 45
沖縄大会開催の振り返り 46
スタッフ名簿 47
大会実行委員スナップ 48
あとがき 50

●大会要綱

青少年国際交流事業事後活動推進大会
日本青年国際交流機構第 28 回全国大会
第 19 回青少年国際交流全国フォーラム
沖縄大会開催要項

1. 目　的: 内閣府、地方公共団体等の行う青少年国際交流事業の既参加青年が集まり、地域における事後活動の推進状況を報告するとともに、全国的な事後活動を更に充実させるための方策について積極的に意見交換を行い、既参加青年相互の交流と研さんを図り、今後の国際交流活動及び地域社会における諸活動の推進に貢献するとともに、国際交流活動を一般の方にも紹介していくことを目的とする。

2. 主　催: 内閣府
日本青年国際交流機構
財団法人青少年国際交流推進センター
沖縄県青年国際交流機構

3. 後　援: 沖縄県
財団法人沖縄観光コンベンションビューロー

4. 主　管: 日本青年国際交流機構第 28 回全国大会沖縄大会実行委員会

5. 協　賛: 商船三井客船株式会社

6. 期　日: 平成 24 年 12 月 8 日(土)～9 日(日)

7. 大会テーマ: ふれ合おう　ちむぐくる　深めよう　ゆいまーる

8. 会　場: サザンビーチホテル＆リゾート
〒901-0305　沖縄県糸満市西崎 1-6-1
TEL:098-992-7500

9. 対象者: 内閣府、地方公共団体などが実施した青少年国際交流事業の既参加青年、青年国際交流事業に関心のある方

10. 参加費:

	種　別	大人(中学生以上)	子ども
A	全日参加(4 人部屋)	16,000 円	10,000 円
B	全日参加(2 人部屋)	17,000 円	10,000 円
C	全日参加(1 人部屋)	22,000 円	―
D	懇親会まで	10,000 円	4,000 円
E	分科会まで	3,000 円	1,000 円

御挨拶

内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室長
伊奈川　秀和

内閣府の青年国際交流事業は、我が国の青年リーダーの育成や、青年間の交流を通じた各国との友好親善を図ることを目的として、50 年以上にわたり実施されてきました。その一つの大きな成果が、日本青年国際交流機構を中心とした、国内外の大きなネットワークであり、また、各国・各地域で活発に行われている事後活動だと思います。

事後活動推進大会は、年に一度、日本全国から既参加青年が集う機会であり、私も、昨年に引き続き出席しました。既参加青年の方との交流や発表を通じて、青年国際交流事業に参加した皆様が、相互に深くつながるとともに、各界や地域で活躍されたり、国際交流や青少年育成など様々な社会貢献活動を活発に行ったりしていることを、改めて実感しました。今後も、交流事業の充実とあわせ、事後活動を応援してまいります。

基調講演においては、「うちなーぐち」（沖縄語）の講師であり、唄三線者として活躍されている比嘉光龍（ふぃじゃ　ばいろん）氏から、「三線」（沖縄三味線）の美しい演奏を交えながら、うちなーぐちの魅力やマイノリティを大事にする重要性について、訴えかけるような迫力のある講演をいただきました。
その後も 11 のテーマに分かれて、沖縄の文化・食の体験や、歴史・平和について、充実した分科会が行われました。分科会では、体験や見学に加え、ものづくりや歴史の継承に携わっている方の考えや思いを直接伺うことができ、より深い学びを得ることができました。

懇親会でも迫力ある沖縄空手の演武やエイサーの踊りや太鼓、沖縄の伝統料理など、沖縄らしい趣向が随所に凝らされており、参加した事業、世代、地域の枠を超え、皆が一体となって楽しみ、交流を広げられたと思います。

また、事後活動報告では、若い世代の既参加青年が、自ら考え、実行した社会貢献活動、国際交流活動についての報告を聞き、新しい事後活動の芽がすばらしい花を咲かせつつあることを感じました。

沖縄での全国大会を成功裏に終えることができたことを心から嬉しく思いますとともに、本大会開催のために御尽力された青木実行委員長を始め、実行委員会の皆さん、沖縄県青年国際交流機構の方々、沖縄県及び地元の関係者各位に厚く御礼申し上げます。

今回の沖縄大会は、沖縄の文化に触れながら、青年国際交流を通じて培った「万国津梁」の精神を新たにしてくれたのではないでしょうか。参加者の皆様が、世界の、地域の、社会の「架け橋」として、更に活発な活動を展開していただくとともに、国際交流の輪を大きく広げていただけるよう期待しております。この報告書が、その一助になることを願っています。

めんそーれ沖縄

日本青年国際交流機構会長
大河原　友子

日本青年国際交流機構第 28 回全国大会が沖縄のサザンビーチホテル＆リゾートにて大成功に開催され、日本全国から集まった参加者が、大変実り多き 2 日間を過ごすことができました。

今回のテーマは“ふれ合おう　ちむぐくる　深めよう　ゆいま～る”真心を込めて他人を思いやる優しい気持ちでお互いを助け合いましょう。と意味し、沖縄の人々の温かい精神を表した素敵な言葉だと思いました。実行委員会の願いどおり、多くのプログラムを通じて年代や地域を超え多くの人が交流を広げ、繋がる場となりました。

基調講演にお招きした比嘉光龍（ふぃじゃ　ばいろん）氏は自らをアメリカ系うちなーんちゅ（おきなわ人）と呼び、人を引き付けるトークや沖縄三線を操りながら歌ったりして楽しませてくださいました。「日本にはユネスコから認定されている言語が日本語以外に八つある」など新しい発見をし、沖縄語を含め6種ある琉球語、アイヌ語、八丈語は消滅危機言語にさらされている現状なども知ることができました。
その後、様々な角度から沖縄を理解する為に分科会が 11 コースも用意され、多くの参加者が充実した時間を過ごすことができました。行き帰りのバスの中でのプログラムも事前に考えていてくださったようで更に効果的だったと思います。

2 日目には、IYEO や社会貢献で長年活動していらした御功績を称える為に歴代の大先輩方の表彰式が行われました。次世代の方たちには良い刺激になったことでしょう。報告会では各自の事業及び事後活動の特徴を興味深く聞く良い機会となりました。

オプショナルツアーで、私は「本島中部視察コース～県民生活と基地」に参加させていただきましたが、毎日ニュースなどで聞いている問題も、地元の方の目線で体験することでぐっと身近に感じることができました。地域とそこにくらす人々を理解することなしにどんな問題も解決することはできないことを実感しました。

様々なプログラムを通して参加者ひとりひとりが沖縄を楽しみ、理解する良いきっかけになったことはもちろん、全国の仲間が一堂に会し交流を深めることができました。

閉会式では精一杯やり遂げた青木実行委員長の感動的なスピーチを聞き、若者の持つパワーを感じ次世代への期待が高まりました。実行委員の皆さん、沖縄県、内閣府、(財)青少年国際交流推進センターの皆様の多大な御協力の下、盛大に終了することができました。改めて心より感謝申し上げます。全国大会の旗は三重県へと引き継がれました。20 年に一度という式年遷宮を迎える伊勢の地での、皆様との再会を楽しみにしております。

第 19 回青少年国際交流全国フォーラム　報告書に寄せて

（財）青少年国際交流推進センター理事長
上村　知昭

第 19 回青少年国際交流全国フォーラム・日本青年国際交流機構第 28 回全国大会は、復帰後満 40 年となった沖縄県での開催でした。その地理的位置から多くのアジア諸国との交流・交易などを通じて、多様でしかも南国らしさを醸し出す紅型、やちむん（焼き物）等、私たちを魅了してやまない特有の文化をはぐくんできており、それは分科会の文化体験コース等からも十分伝わってきたところと存じます。

青年国際交流の分野では「世界青年の船」事業が、近年続けて那覇に寄港し、沖縄県 IYEO の皆さんには受入れの中心となって御活躍いただいており、今回の全国大会・青少年国際交流全国フォーラムも青木実行委員長はじめ、実行委員そして沖縄県 IYEO の皆さんの熱い思いと惜しみない御努力で立派な大会となりました。国際交流既参加者の皆さんの絆と事後活動の状況を確認しつつ、相互研さんを図るとともに、世の方々にも国際交流事業がいかに意義のあるものかを知っていただくよい機会を提供するという、所期の目的は十分達成されたと存じます。実行委員、沖縄県 IYEO の皆さんの御尽力に深く敬意と謝意を表しますとともに、大変うれしく存ずる次第です。

第 19 回青少年国際交流全国フォーラムの基調講演は、比嘉光龍（ふぃじゃばいろん）氏の「沖縄のこころとうちなーぐち」についてでした。沖縄島でもユネスコが認定した言語が二つあり、宮古、石垣もまた異なる言語として認定されていることを知り改めて多様性などを認識し、そして、社会的弱者を知るということなどいろいろ勉強をさせていただきました。また分科会も 4 分野 11 コースという沖縄にふさわしい意義あるもの、興味深いものなど多彩で得るところが大きかったのではないかと存じます。この大会・フォーラムの参加で得られた成果を皆さんの今後の社会の貢献活動にいかしていただき、各分野でますます御活躍されることを期待し願っております。ここに重ねて実行委員及び沖縄県 IYEO の皆さんに深く感謝申し上げますとともに、御支援、御協力をいただいた沖縄県をはじめ地元の関係各位に厚く御礼を申し上げる次第です。

今日では、どの県でも「ブロック大会」が、そして多くの都道府県で「全国大会」も開催でき、内容も充実し、多彩になってきていることはうれしいことです。また、IYEO の皆さんが、内閣府青年国際交流事業で招へいされた外国青年の「国内プログラム」等を実施する実行委員会で、その中核となって活動されていることに敬意を表しますとともに、今後とも派遣の経験などをいかされてそれぞれの地元、それぞれの分野で国際性に富み、内外に広いネットワークを持つ青年リーダーとして大いに御活躍され、ますます評価を高められることを祈念して、「大会の報告」に寄せる言葉といたします。

無限にひろがる沖縄のこころ

沖縄県青年国際交流機構
第 28 回全国大会沖縄大会実行委員長　青木　剛志

日本青年国際交流機構 第 28 回全国大会沖縄大会に御参加いただいた皆さま、遠路はるばる沖縄までお越しいただき本当にありがとうございました。また、沖縄県 IYEO の皆さん、本部の方々など、僕が派遣された「国際青年育成交流」事業（ヨルダン派遣）から今大会にまで関わった全ての方々に感謝いたします。

今大会の目的は、「事後活動の報告」「既参加青年の交流」「一般の人々への事業の広報」の三つでした。また、テーマは「ふれ合おう ちむぐくる 深めよう ゆいまーる」であり、ねらいは参加者に「沖縄のこころ」にふれてもらうことでした。目的、テーマ、ねらいの語義はさておき、参加者の皆さまは、今大会で沖縄のこころに触れていただけたでしょうか。それを達成できていれば、今大会は大成功、この大会の準備から始まる僕の事後活動は順風満帆です。

基調講演、分科会など全てにおいて「沖縄のこころ」にふれられるようなものにしようと、実行委員一同工夫を凝らしました。少なくとも、大会のどこかに触れるきっかけはあったはずです。あとは、参加者の皆さまの心構え次第。触れたこころを今後の活動にどういかすかも日頃の心がけにかかっているでしょう。数値化できない目に見えぬ個人の成長というものに重きをおける人々こそ社会の財産であって、IYEO とはそういった人の集まりだと信じています。

皆さん、ぜひ共にいい事後活動をしていきましょう。皆さんが今大会で触れた沖縄のこころは、各個人の心がけと、そして何より同じ志をもつ仲間がいれば無限にひろがる可能性のあるものです。どういかすか、どこに広げるか、今後僕も考えていきたいと思っています。

最後に、学生の僕を実行委員長として最後まで支えてきてくださった実行委員の皆さんに心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

大会終了によせて

沖縄県青年国際交流機構
会長　上江洲　利奈

はじめに、全国大会沖縄大会を開催するにあたって、IYEO 本部の皆様、（財）青少年国際交流推進センターの皆様、参加者の皆様へ感謝申し上げます。その他、全国各地関係者の皆様より激励のお言葉をいただき、また大会当日には実行委員会宛にたくさんの差し入れをいただきました。今大会の成功は、こうした皆様の御協力とお力添えあってのものだと改めて感じています。本当にありがとうございました。

私が沖縄県 IYEO 会長に就いた 3 年前、すでに沖縄大会開催が決定しており、右も左もわからないまま、漠然と「大変な時に会長になってしまった」というのが、正直な気持ちでした。当時、沖縄県 IYEO は主要活動メンバーが 10 人にも満たず、「本当に実行委員会を結成できるのか」も不安なところでした。

あれから 3 年の間に、活動メンバーは 20 人を超え、着々と全国大会への準備態勢が整っていきましたが、学生会員が多く、またほとんどの社会人会員もイベント企画の経験がなく、メンバーの実践力強化と人員確保が重要な課題でした。幸い、2010 年から「世界青年の船」事業を継続的に受入れさせていただくことができ、これは、実践力強化にとても役立ち、今では各分野を担当ごとに任せられるほど、各メンバーが大きく成長したと思います。

テーマの設定については、「沖縄らしさ」を意識しつつ、「普通の観光では伝えられないこと」を伝えたいというメンバーの想いから「ふれ合おう　ちむぐくる　深めよう　ゆいまーる」としました。メンバーの中には県外出身者も数名いますが、皆、それぞれに「第 2 のふるさと　沖縄」を伝えたい気持ちは熱く、すぐにたくさんのアイデアが湧いてきて、最初は収拾できないほどでした。それを一つ一つ、目的やねらいについて話し合い、テーマとのズレを修正しつつ、メンバー一丸となって大会を作っていったつもりです。その結果、分科会は 11 という多数になってしまいましたが、どれもメンバーの想いを伝えるのに相応しい内容に仕上がりました。その他のプログラムも、心をこめて準備しました。

大会開催期間中、参加者の皆様が常に笑顔で過ごしていただけたことと、大会終了後に「楽しかった。ありがとう。」と言っていただけたことが、何よりも嬉しく、準備期間の苦労も、連日の寝不足も吹き飛ぶ思いでした。一参加者ではなく、主催者として、こうした素晴らしい大会に関わることができ、大会開催の機会を与えてくださった IYEO 関係者の皆様、「沖縄で全国大会を開催しよう」と奮起された豊川沖縄県 IYEO 顧問、それをサポートしてくださった皆様に改めてお礼を申し上げたいと思います。

最後に、基調講演をいただきました比嘉光龍様、分科会および地域理解研修において講師を務めていただきました皆様に、IYEO の活動に御賛同いただき、快く御協力くださいましたこと、心より感謝申し上げます。

関係者の皆様、参加者の皆様、本当にありがとうございました。

●大会日程

大会 1 日目： 12 月 8 日（土）

時　間	内　容
12:30	受付
13:30	開会式
14:00	基調講演 『沖縄のこころと うちなーぐち（沖縄語）』
15:30	分科会 『文化を体験する』 A：オキナワ空手体験　～空手に学ぶ「他己理解」 B：エイサー体験　～エイサーで繋ぐ地域と世代 C：沖縄の心　三線（さんしん）入門　～人々の生活とともに D：うちなーぐち入門　～語る伝える美（ちゅ）ら言葉（くとぅば） E：伝統工芸体験　～アジアとの交易で栄えた琉球文化 『食を体験する』 F：ゆし豆腐から生まれる地域の絆と伝統 G：泡盛は交易の要！？ 『平和を学ぶ』 H：ひめゆりの語りべと、その孫たち　～ひめゆりの塔 I：摩文仁の丘に想う歴史の伝え方　～平和祈念公園 『歴史を歩く』 J：「守礼の邦」の心得 K：うちなーで昇華した中国建築
19:30	懇親会

大会 2 日目： 12 月 9 日（日）

時　間	内　容
9:00	表彰式
9:45	各都道府県及び個人の事後活動紹介
10:45	閉会式
11:30	地域理解研修 1．本島北部視察コース　～オリオンビール工場見学 2．本島中部視察コース　～県民生活と基地 3．那覇市内散策①　～国際通りと牧志公設市場 4．那覇市内散策②　～壷屋のツボ

●開会式

1 日目　12 月 8 日（土）13:00 ～　／　サザンビーチホテル＆リゾート「コーラルグランデ」

司　会：古謝　由紀子

1. 開会の言葉	第 28 回全国大会沖縄大会実行委員長	青木　剛志
2. 主催挨拶	内閣府子ども若者･子育て施策総合推進室長	伊奈川　秀和
	日本青年国際交流機構会長	大河原　友子
	(財)青少年国際交流推進センター理事長	上村　知昭
3. 来賓挨拶	沖縄県知事	仲井眞　弘多
4. 来賓紹介		
5. 閉式の言葉	沖縄県青年国際交流機構会長	上江洲　利奈

第 28 回全国大会
沖縄大会実行委員長
青木　剛志

内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室長
伊奈川　秀和

日本青年国際交流機構
会長　大河原　友子

財団法人青少年国際交流推進センター理事長
上村　知昭

沖縄県副知事
上原　良幸

沖縄県青年国際交流機構
会長　上江洲　利奈

●基調講演　「沖縄のこころと　うちなーぐち（沖縄語）」

1 日目　12 月 8 日（土）13:30 ～　／　サザンビーチホテル＆リゾート「コーラルグランデ」

司　会：古謝　由紀子

「かじゃでぃ風」（かぎやで風。祝宴の座開きとして踊られる祝儀舞踊。）の三線の演奏で始まった基調講演。比嘉氏御自身の経歴の紹介やうちなーぐち（沖縄語）から考える若者の社会的貢献のあり方を軽快なトークを織り交ぜながら、和気あいあいと講演がすすめられました。

■講　師：比嘉　光龍（ふぃじゃ　ばいろん）氏
■テーマ：「沖縄のこころと　うちなーぐち（沖縄語）」
■内　容：

20 代、30 代の青年が社会貢献をするにあたって大切なことは、「社会的弱者の存在を知る」ことが大切です。社会的弱者から連想するものは、「母子家庭、女性、子供、年寄り、身体障害者、病人、在日外国人・・・」などいろいろ揚げられるが、その存在を知り、その立場に立って考えることが若者にできる社会貢献の第一歩ではないでしょうか。

2009 年にユネスコが「日本には日本語（一般に使われている標準語）のほかに 8 種類の言語（アイヌ語、八丈語、奄美語、沖縄語、国頭語、宮古語、八重山語、与那国語）がある」と発表しました。しかし、マスコミでは報道されていません。ユネスコの発表からもわかるように、日本は多言語を有する多言語国家であり、うちなーぐち（沖縄語）は独立した言語です。うちなーぐち（沖縄語）を「沖縄方言」と表現する人がいますが、「方言」とはメインの言語から派生してメインの言語より下だということになります。比嘉氏は、692 年間琉球という独立した国家で使われていた言語が「方言」ではないと考えています。

沖縄の人は 80 代以上の方を除いて、きちんとしたうちなーぐち（沖縄語）が話せなくなっています。その原因は、沖縄の歴史と深く関わっているのです。1187 年から 1879 年まで沖縄は「琉球王国」として独立した国家で、その間沖縄では琉球諸語（沖縄語、国頭語、宮古語、八重山語、与那国語、奄美語）が使われていました。1879 年から 1945 年日本に強制的に支配され、「日本語」を強要されたのです。

外国でもいったん排除されようとした言語が復活している言語があります。ハワイ語もアメリカによる支配で一時は消えようとしていましたが、現在は授業の一環で必ずハワイ語を教え、ハワイ語のみで授業を行う学校もあります。ハワイは言語的・文化的復興を果たしているが、アメリカから独立し、独自の国家をつくろうという動きはありません。自分たちの文化・言語を大切にしながらアメリカという国家の中に存在しているのです。沖縄も独自の文化・言語を大切にしながら、日本国家の中で存在感のあるマイノリティになってくれたらいいと思います。その他言語復興を果たした例は、イギリスのウエールズ、スペインのカタルーニャなどがあります。

国際交流など海外に目を向けることも大切でですが、日本における社会的弱者（マイノリティ）に目をむけることも大切です。沖縄の歴史、うちなーぐち（沖縄語）というマイノリティにも目を向け、その存在を通して日本という国家を考えていただきたい。私はうちなーぐちと併せて沖縄の歴史も勉強するようになり、今まで自分が学校などで教えられてきた沖縄の歴史は中央政府から見たものだったんだなあと思うようになりました。沖縄は南国のリゾート地として知られ、穏やかなのんびりしたイメージがありますが、沖縄の歴史は過酷です。沖縄というマイノリティをきちんと知ることによって、日本の中のさまざまなマイノリティにも目を向けることができ、海外のマイノリティを理解することができるようになるのではないでしょうか。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

最後は、会場全員でカチャーシー（沖縄を代表する手踊り）を踊り、大盛り上がりの中、幕を閉じました。聴講者からの質問もたくさん出て、大変有意義な基調講演となりました。

講師紹介：　比嘉　光龍（ふぃじゃ　ばいろん）　氏

1969 年、那覇生まれの、コザ（現沖縄）市育ち。父は米国人、母は沖縄県金武町出身。国籍は日本のみ。生後すぐ伯父伯母に育てられる。22 歳から米、英合わせて1年半留学した。それまで全く英語は話せなかった。24 歳に初めて三線に触れる。うちなーぐちは、うちなー芝居の名優「真喜志康忠（まきしこうちゅう）」氏に師事。
テレビ・ラジオ出演のほか、司会業やうちなーぐち講師としても活躍中。NHK などローカル番組での脚本や情報誌への執筆活動も行っている。

●分科会一覧

テーマ	分科会名	内容
文化を体験する	A:オキナワ空手体験 ～空手に学ぶ 「他己理解」	沖縄空手道剛柔流八段、沖縄県 IYEO 会員の金城常雄氏（昭和55 年度第 14 回「青年の船」参加、平成 7 年度第 2 回「国際青年育成交流」事業ヨルダン派遣団長）、儀間哲氏を講師に迎え、本場の空手を体験しました。また空手を通して、「沖縄の礼節の心」にも触れます。
	B:エイサー体験 ～エイサーで繋ぐ 地域と世代	エイサーとは、沖縄の盆踊りにあたる勇壮な太鼓踊り。浦添市で活躍する「前田エイサー」のみなさんを講師に迎え、地域の絆、青少年育成にエイサーがどのように活用されているか学びます。パーランクー（小太鼓）を使って、エイサー踊りを体験します。
	C:沖縄の心　三線入門 ～人々の生活とともに	沖縄県三線製作事業協同組合の協力のもと、初心者でも無理のない曲を実際に演奏し、人々の暮らしに溶け込んでいる三線とその歴史についても学びます。
	D:うちなーぐち入門 ～語る伝える 美（ちゅ）ら言葉（くとぅば）	基調講演の比嘉光龍（ふぃじゃばいろん）氏を講師に迎え、ひとつの言語としての「うちなーぐち」を学びます。簡単な挨拶や自己紹介を通して、言葉は文化であり、アイデンティティであることを再認識します。
	E:伝統工芸体験 ～アジアとの交易で 栄えた琉球文化	那覇市伝統工芸館にて、紅型（びんがた）、首里織、壷屋シーサー、琉球ガラスの各コースに分かれ、制作体験をします。体験を通して、中国、日本、東南アジアとの関わりの中で育まれた琉球独自の文化に触れることができます。
食を体験する	F:ゆし豆腐から生まれる 地域の絆と伝統	第二回地域再生大賞、平成 22 年度文科省より優良公民館として表彰された NPO なはまちづくりネット（那覇市繁多川公民館）より南信之介さんを迎え、沖縄の郷土食「ゆし豆腐」づくりを体験しました。豆腐づくりを通して、地域の絆を深める姿を学びます。
	G:泡盛は交易の要!?	豊見城市にある「くぅーす（古酒）の杜　忠孝蔵」（くぅーすのもり、ちゅうこうぐら）を訪ね、製造工程を見学します。 琉球王国時代に遡る泡盛交易や泡盛文化について学びます。
平和を学ぶ	H:ひめゆりの語りべと、 その孫たち ～ひめゆりの塔	アメラジアンスクール・イン・オキナワ教員で平和ガイドの北上田源（きたうえだげん）氏と沖縄戦跡を訪ねます。琉球大学平和ボランティア・サークルの学生や、平和ボランティアガイドの方々のサポートを受け、内容の濃い時間を過ごします。
	I:摩文仁の丘に想う 歴史の伝え方 ～平和祈念公園	平和祈念資料館主催「家族に語り継ぐ平和のウムイ（想い）事業」に関わる玉元三奈美さんを迎え、平和祈念公園および資料館を見学します。
歴史を歩く	J:「守礼の邦」の心得	沖縄の代表的な観光スポットの首里城を、那覇市観光協会主催の 「まちま～い」（「町を散策する」という意味）ガイドと、より深く、より楽しく、見てまわり、沖縄の歴史・文化を学びます。
	K:うちなーで昇華した 中国建築	世界遺産にも登録されている閑静な琉球庭園を訪れました。那覇市観光協会主催の 「まちま～い」（「町を散策する」という意味）ガイドと一緒に、独特の建築様式や歴史について学びます。

●分科会 A　オキナワ空手体験　～空手に学ぶ「他己理解」

1 日目　12 月 8 日（土）15:30 ～　／　沖縄県立那覇西高等学校　武道場

担　当：渡嘉敷　信一郎、川上　哲平

■講　　師：金城　常雄　氏（第 14 回青年の船事業既参加青年、沖縄空手道剛柔流八段）
　　儀間　哲　氏　（沖縄空手道剛柔流八段）

■参加人数：6 名

■内　　容：

沖縄は空手発祥の地であり、その本家本元で名人による指導のもと、空手を体験できる機会はなかなかないと思いますが、沖縄県 IYEO には幸運なことに沖縄空手道に詳しい、会員の金城常雄さんがいらっしゃるので、今回も御指導をお願いすることができました。

会場となる沖縄県立那覇西高校武道場に到着後、参加者の皆さんは動きやすい服装に着替えます。お互い若干緊張気味の自己紹介を経て、まずは空手の歴史についての簡単なレクチャーを金城さんからしていただきました。現在の、スポーツとしての空手ではなく、相手を倒す武術としての空手道が現在も沖縄には脈々と受け継がれているということなどを話していただききました。

その後、いよいよ実践です。今回は時間が限られているので、護身に役立つ「受け」に的を絞って行うことに。初めは金城さんと儀間さんによるデモンストレーションです。「受け」というのは、後ろに退くのではなく、相手に向かっていくものだ、との説明に一同目から鱗でした。

相手の「突き」を文字通り、跳ね飛ばすように払いのける「受け」を繰り返すうちに、参加者の動きも徐々に良くなっていきます。動きについてマンツーマンで指導していただく参加者の目は真剣そのものでした。

次に暴漢に襲われたという設定のもと、向かってきた相手の力を利用して、相手をひっくり返す練習などを行いました。休憩時間を設けたのですが、その時間中にも講師の金城さんに質問する参加者もいて、非常に高いモチベーションを保ったまま 90 分があっという間に過ぎました。最後に参加者は金城さんから分科会空手体験修了証書を受け取り、晴れ晴れとした顔で懇親会会場のホテルへと向かったのでした。

●分科会 B　エイサー体験　～エイサーで繋ぐ地域と世代

1 日目　12 月 8 日（土）15:30 ～　／　サザンビーチリゾート＆ホテル「コーラルウェスト」

担　当:白井　宏明

■講　　師:　前田エイサー　平良　龍雄　氏　（他　6 名）

■参加人数:　18 名

■内　　容:

エイサー分科会は、浦添市前田の地元青年で構成されている「前田エイサー」の皆さんを講師に迎えて開催されました。「せっかく体験するのだから」と、練習の成果発表として懇親会で演舞することが最終目標として設定されていました。

沖縄のエイサーは、旧盆の時期に踊られる念仏踊りの一種で、1600 年代に東北地方の袋中上人（たいちゅうしょうにん）によって伝えられたものです。現在も各地域の青年団などによって受け継がれており、沖縄県民に広く親しまれています。

分科会では、大太鼓、締め太鼓、パーランクー（半胴鼓）の 3 つのパートに分かれて練習を行いました。

参加者の皆さんは、分科会が始まってから「懇親会で演舞する」ことを聞かされ、とても驚かれていたのと同時に、必死に練習に取り組む姿がとても印象的でした。参加者は、必死さの中にも笑顔があふれ、時間が過ぎるのもあっという間でした。

参加者の方からは、「沖縄の文化を体で感じる特別な体験となりました。リズミカルな音と動きで、最初はついていくのが必死でしたが、沖縄での全国大会を共につくり上げる機会をいただいたことに、感謝しています。」とのコメントをいただきました。

懇親会では、エイサーの衣装に身を包んだ分科会参加者の皆さんが会場を盛り上げ、アイドルさながらの写真撮影を受けていました。

実行委員会では「懇親会に出演してもらうことに、参加者が賛同してくれるか」という不安もありましたが、分科会開始直後からその不安は吹き飛び、最後には、全国大会が、実行委員会だけでなく、全員で作り上げられているということを改めて感じられる分科会となりました。

●分科会 C　沖縄の心　三線（さんしん）入門　～人々の生活とともに

1 日目　12 月 8 日（土）15:30 ～　／　サザンビーチリゾート＆ホテル「コーラルイースト」

担　当：藤岡　宏美

■講　　師：仲嶺　幹　氏（沖縄県三線製作事業協同組合）
　　松田　綾子　氏（三線演奏家・三線カルチャー講師）
■参加人数：19 名
■内　　容：

三線分科会は、沖縄で人々に親しまれている楽器、三線を実際に弾き、沖縄の文化に触れることを目的として行われました。

分科会のスタートは、まずは講師お二人の自己紹介の後、三線の歴史、型等の説明から始まりました。

現在の三線のルーツから始まり、現在伝わる三線の型（南風原型、知念大工型、久場春殿型、久葉の骨片、真壁型、平中知念型、与那城型）の七つを紹介いただきました。この中で現在最も普及しているのが真壁型で、特に良い音が鳴る名器として伝わる古い三線も、全てこの型で作られているそうです。

三線には蛇皮が張られており、王朝時代には蛇皮が高価だったため、庶民は馬・牛皮などを代用していました。カットしていない大人の身長ほどもある乾燥させたニシキヘビの皮を、講師の方が広げて見せて下さったときには、参加者からは思わず驚きの声がもれました。

現在、三線は琉球古典音楽をはじめ、民謡、沖縄ポップスなどいろいろなジャンルの音楽に利用されており、平成 24 年 11 月末に三線は、沖縄県指定の伝統工芸品に指定されたことも紹介されました。

約 20 分の説明の後、待ちに待った三線体験が始まり、あらかじめ講師により調弦された三線をかまえ、右手にバチをもって弾き方を教わります。三線は、漢字の記号で表した「工工四」という譜面を使いますが、今回は講師が独自に開発した譜面（初心者でもすぐに見やすいよう数字で表示されています。）を使いました。

最初にみんなで挑戦したのは「キラキラ星」です。譜面を見ながら、とてもゆっくりではありますが一曲最後までとおすことができました。数回「キラキラ星」を弾いた後、「花」にも挑戦しました。「キラキラ星」よりも長い曲で、慣れない譜面とにらめっこしていると、三線を構えた肩がこり、バチをもった右手もしびれてきます。ゆっくりみんなで一緒に弾いた後、休憩をはさみながら自主練習し、最後にみんなで弾いてみると最初よりずいぶんスムーズに「花」を弾くことができ、会場には三線の良い音が響きました。

譜面の見すぎで少々しかめっ面になっていた参加者もいましたが、最後の集合写真を撮るころには、三線を片手に笑顔があふれていました。

●分科会Ｄ　うちなーぐち入門　～語る伝える美（ちゅら）ら言葉（くとぅば）

1 日目　12 月 8 日（土）15:30 ～　／　サザンビーチリゾート＆ホテル　ホワイエ

担　当：古謝　由紀子

■講　　師：比嘉　光龍（ふぃじゃ　ばいろん）氏
■参加人数：14 名
■内　　容：

基調講演の演者「比嘉　光龍（ふぃじゃ　ばいろん）」氏を講師に迎え、うちなーぐち講座が行われました。

まず講師が受講者それぞれに受講者の出身地とその御両親の出身地を質問し、その受講者が使っている言葉がどの地域に影響されているかを考えていきました。

その後、うちなーぐちの基本的な発音やあいさつや使い方を学びました。

14 名という少人数の中、和気あいあいとした雰囲気で講座がすすめられました。

受講者から「言語は統一したほうがコミュニケーションの妨げにならない」という意見も出ましたが、講師は「言語の独自性を大切にすることは文化の継承にもつながるので、それぞれの言語を大事にしてほしい」と説明されました。

●分科会Ｅ　伝統工芸体験　～アジアとの交易で栄えた琉球文化

１日目　12 月 8 日（土）15:30 ～　／　那覇市伝統工芸館

担　当：仲間　若菜

■講　　師：比嘉　司　氏　（那覇市伝統工芸館　館長）
■参加人数：33 名
■内　　容：

沖縄の伝統工芸にはいろいろなものがあるが、その中でも有名な、紅型、漆器、首里織、壺屋シーサーを実際に工芸体験することで、沖縄の伝統工芸に興味を持ってもらい、これらの伝統工芸が沖縄で育まれた歴史について学ぶことを目的としました。

ホテルからバスで約30分ほど移動し、那覇市の国際通りにある伝統工芸館を訪問しました。そこで、紅型、琉球ガラス漆器、首里織、壺屋シーサーの四つのグループに分かれ、実際に工芸体験をしました。参加者は、皆、真剣に工芸品を作成され、「次は、他の工芸品についても作ってみたい」という声や「リベンジしてもう一度作成したい」という声も聞かれました。

出来上がった作品については、旅の記念に持ち帰っていただき、参加者は出来上がりに満足した様子でした。

その後、ホテルへと戻るバスの中で、館長がこれらの伝統工芸が沖縄で生まれ発展した歴史についてレクチャーしてくださいました。皆、興味津々に講師の説明に耳を傾け、活発な質疑応答が繰り広げられ、バスの中ではある種の達成感が感じられました。

今回の伝統工芸体験を通して、日本本土とは異なった歴史の中で、アジアとの深い関わりを持ちながら発展した琉球文化に興味をもっていただくことができたのではないかと思い、また、それを期待しています。

●分科会Ｆ　ゆし豆腐から生まれる地域の絆と伝統

１日目　12 月 8 日（土）15:30 ～　／　那覇市繁多川公民館

担　当：具志堅　広子

■講　　師：南　信之介氏　（NPO法人　なはまちづくりネット）
■参加人数：16 名
■内　　容：

今回、ゆし豆腐作りの分科会を担っていただいたNPO　なはまちづくりネットは、那覇市が那覇市内７館目の公民館である繁多川公民館を民間への委託決定に伴って、公民館を母体として社会活動を推進していきたいとの高い志を持ったメンバーによって 2003 年に設立された団体です。地域の自治会や小中学校、高校など地域との連携を積極的に行って活動をしています。その活動は、平成 22 年度に優良公民館として文部科学大臣表彰の受賞や平成 24 年度　第 2 回　地域再生力大賞にて優秀賞を受賞するなど高く評価されています。

バスに乗り、本大会のメイン会場であるサザンビーチホテル＆リゾートを出発し、移動すること約 40 分。目的地である繁多川公民館に到着しました。道を渡ると公民館前広場では、NPO　なはまちづくりネット代表の大城氏、講師である南氏、そしてあたいぐぁープロジェクトの会長さんである久高さんを始め、数名の地域の方がゆし豆腐作りに集まってくださっていました。そして石臼や大きな沖縄のお鍋“シンメーナービー”もガス釜の上にセットされており、ゆし豆腐を作る準備は万端に整っていました。

早速、参加者の皆さんに手を洗ってきてもらった後、分科会開始。はじめのあいさつや、講師紹介の後、参加者全員で「豆腐行進曲」という体操を踊りました。豆腐を作る工程も交えたユニークな体操で参加者の皆さんからはすでに笑顔がこぼれていました。体も温まったところで、ゆし豆腐作り開始。南氏からは繁多川地域には、豆腐作りにはかかせない水が豊富なことなどを含めた説明をしていただきながら、まずは石臼挽き体験。徐々に地域の子どもたちが集まり出し、大人たちの石臼挽きを見ながら伝統を子どもたちが継承している場面を発見しました。それは、石臼に大豆がなくなったのを見越して、子どもが、石臼上部にあった大豆をさっと穴に入れてくれたのです。その様子に感動しながら、次は絞り体験。その後、先に温めてくださっていた豆乳の中ににがりを入れ、豆腐が生まれるのを参加者全員で、今か今かと待ちかねました。そしてついに豆腐が生まれ、全員で試食タイム。識名園組も合流し、おいしくゆし豆腐をいただきました。おいしい香りに誘われて、地域の子どもたちも一緒に食べることができ、人が集う公民館の様子もみていただくことができました。また、豆腐を作りの目的が、豆腐作りを通して、次代を担うこどもたちが自分自身や地域を誇りに思い、育つように、地域の人々が一丸となって関わりながら、伝統を作っていくという取組であるということもお伝えできたと思ういます。温かくおいしいゆし豆腐をいただき、心も体も温まる分科会でした。

●分科会 G　泡盛は交易の要！？

1 日目　12 月 8 日（土）15:30 ～　／　くぅーす（古酒）の杜 忠孝蔵（豊見城市）

担　当: 古謝　裕之

■講　　師:大城　勤氏 （忠孝酒造株式会社　代表取締役社長）

■参加人数: 26 名

■内　　容:

沖縄の地酒といえば泡盛。この分科会では、泡盛の製造や熟成方法、歴史的背景などについて学ぶために、豊見城市にある忠孝酒造所内の「古酒（くぅーす）の杜　忠孝蔵」を訪ねました。

最初に忠孝酒造所の歴史についてのビデオを鑑賞した後に、実際に貯蔵するための貯蔵タンクや泡盛を熟成させるための甕が製作されている施設を見学しました。

その後、会議室にて5年、10年、15年と3種類の古酒を飲み比べながら、忠孝酒造の大城社長から泡盛とその歴史についてのレクチャーを受けました。泡盛がタイから沖縄に伝えられたため現在もタイ米が使用されていることや、沖縄は高温多湿な気候のため日本酒に使われる黄麹菌ではなく腐りにくい駒麹菌が使用されていることなど、沖縄人の私にとっても興味深い内容でした。社長によるレクチャーは参加者からの質問が多く、予定時間が過ぎる程の熱心さ。ちなみに、泡盛の語源は、高いアルコール度数の酒を蒸留する際に導管から受壷に落ちる時、泡が盛り上がることから、「泡を盛る」となり、転じて「泡盛」となったそうです。また、「泡盛」を水割りにし15度に薄めると美味しく飲めるという説明もありました。その理由は、一般的に食事の時に飲まれているワインや日本酒は15度前後で、そのアルコールが料理を引き立ておいしく食べられる度数であるとの話もあり、目からうろこが出るほど面白い話ばかりでした。

最後に、ショップにて忠孝酒造の「くぅーす梅酒」、「シークヮーサーリキュール」のオリジナル商品の試飲やお買い物タイムでこの分科会が終了しました。

●分科会 H　ひめゆりの語りべと、その孫たち　～ひめゆりの塔

1 日目　12 月 8 日（土）15:30 ～　／　ひめゆりの塔（糸満市）

担　当：小池　夏姫

■講　　師：北上田　源　氏（アメラジアンスクール・イン・オキナワ教諭）
■協　　力：琉球大学平和ボランティアサークル（Peace Now Okinawa）
■参加人数：30 人
■内　　容：

この分科会の狙ねらいは、南部にあるひめゆりの塔・ひめゆり平和祈念資料館へ訪問し、次世代に平和を伝え続ける意味を学ぶことです。講師としてアメラジアンスクール・イン・オキナワの教員で平和ガイドの北上田　源先生を招き、琉球大学の平和ボランティアサークルの学生がサポートしてくれました。

行きのバス車内では講師・ボランティアの方々の自己紹介をし、わきあいあいとした雰囲気でスタートしました。

現地についてから、まず3グループに分かれてもらって、各グループに1名ずつボランティアの方についてもらいました。資料館外にあるひめゆりの塔の前で、北上田先生に防空壕やひめゆり学徒隊についてお話ししていただきました。館内でも、グループごとに回ってもらい、展示を見ながらボランティアの方に補足説明やお話をしてもらいました。

館内では、参加者のみなさんが熱心に展示品や証言ビデオを見ている姿がとても印象的でした。また、私と同世代の学生が、沖縄の歴史を語り継ぐ姿に感化されました。

館内を回った後は、外でまたグループごとに各々が感じたこと・思ったことを共有してもらう時間をとりました。帰りのバス車内でも、一緒に乗り合わせた平和祈念公園分科会メンバーと共に、代表して何名かが前に出て感想を言ってもらいました。行きのバスとは車内の雰囲気が変わり、沖縄の歴史を目の当たりにしたためか、帰りのバス車内は少々重い雰囲気でした。

参加者からは「自分の知らない沖縄がたくさん発見できました」「帰ってから自分の周りにも伝えていきたい」「とても勉強になりました！」などのコメントをいただきました。

この分科会を通して、少しでも沖縄の歴史について知ってもらい、この歴史が風化しないことを祈ります。

●分科会Ｉ　摩文仁の丘に想う歴史の伝え方　～平和祈念公園

１日目　12 月 8 日（土）15:30 ～　／　平和祈念公園（糸満市）

担　当：二木　良平、棚原　弘一

■講　　師：　玉元　三奈美　氏（世界若者ウチナーンチュ連合会沖縄本部代表）

■協　　力：　大田　光氏（平和ボランティアガイド）

■参加人数：　13 名

■内　　容：

この分科会の狙いは、南部にある沖縄県平和祈念資料館へ訪問し、次世代に平和を伝え続ける意味を学ぶことです。講師として世界若者ウチナーンチュ連合会沖縄本部代表である玉元三奈美氏を招き、また平和ボランティアガイドをなさっている大田光氏にも同行していただき、参加者のサポートをしていただきました。

沖縄県平和祈念資料館へ向かうバス車内では、講師・ボランティアの方々の自己紹介などを行い、ひめゆりの塔の参加者がバスを下車後、平和祈念公園に向かいました。

世界若者ウチナーンチュ連合会は県内在住者の戦争体験を子や孫といった身近な人が取材してそれを映像に残すという「家族に語り継ぐ平和のウムイ」事業に関わっており、その映像は沖縄県平和祈念資料館の映像ブースで公開されています。

現地では、玉元氏から映像ブースや戦争経験者の体験談が読む資料としておかれているセクションをしっかりと見ることを強調され、参加者は各々のペースで館内を見学しました。参加者からの質問には、玉元氏や大田氏が補足説明をしていました。もともと、平和学習に興味をもって参加した方々ばかりだったので、とても熱心に展示資料や映像を見て、積極的に質問をしていたのが印象的でした。

館内の見学後は、沖縄戦で亡くなった方々の名前が刻まれている平和の礎（いしじ）を参加者に見学してもらいました。ホテルへ戻る車中で、数名の感想を共有してもらいました。また、分科会 H「ひめゆりの塔コース」と合流後も参加者数名から感想を聞くことができ、理解を深めることができたと思います。

参加者からは「沖縄を別の側面から見ることができた」「平和について改めて考えることができた」などのコメントをいただきました。

沖縄県出身の母をもつ私自身もこの分科会を通して、沖縄戦の歴史を受け止め、戦争経験者の「生の声」を絶やさず、しっかりと次世代に伝えていくことの大切さをとても実感しました。

●分科会 J　「守礼の邦」の心得

1 日目　12 月 8 日（土）15:30 ～　／　国立首里城公園（那覇市）

担　当：金城　円

■講　　師：新屋　美香　氏（那覇まちま～いガイド）

■参加人数：11 名

■内　　容：

参加者の大半の方は首里城に見学に来られるのが初めてという方が多く、とても真剣にガイドのお話に耳を傾けていたのが印象的でした。私自身、首里で育ったのですが、改めて学び直すことが出来て、とても良い経験となりました。

首里城にはかつて「十嶽（とたけ）」と呼ばれ、最も神聖といわれる 10 カか所の拝所がありました。首里城の中に首里杜御嶽（後述）を作ったのではなく、首里杜御嶽が先にあり、首里城が後から建てられたと言われています。沖縄には御嶽がたくさんあり、今でも拝所として多くの方が神聖な場所として訪れています。

参加者の方々も楽しみにしていた首里城正殿は、現代では王朝時代の美術工芸品の展示や首里城復元の様子を紹介する映像コーナーなどがあり、雄大な琉球の歴史に想いを馳せることができました。

最後に訪れた「西（いり）のアザナ」では、日没の時間帯ということもあり、那覇市を一望しながらの夕日を臨むことができました。琉球王朝時代には、物見台として使われていたようですが、現代では、「裏スポット」として地元の方にも人気があるそうです。（カップルも多いんだとか・・・笑）

参加者の方からは、「ガイドの説明がとてもわかりやすく親切だった」「次に沖縄に来る時も、同じガイドの方を指名したい」とのご感想を多くいただき、大好評でした。

沖縄出身である私自身も、改めて地元を学び直す良い機会となりました。日常的にも首里城のレストランを使うなど首里城に出向き深く学ぶ機会を自ら創っていきたいと思います。

（主な見学スポット）

守礼門　第二尚氏・尚清王代に創建された首里城第二の坊門で、中央の扁額には「守禮之邦」と書かれている。過去に沖縄戦で焼失したが、1958 年に再建され、1972 年には沖縄県指定有形文化財となっている。

首里杜御嶽（すいむいうたき）

広福門（こうふくもん）と奉神門（ほうしんもん）の間に位置する祈りの場。首里杜（すいむい）とは首里城の別称で、御嶽（うたき）とは沖縄の聖地または拝所のことを表す。首里城内にあった 10 カ所の拝所の 10 番目で、男女がともに祈願する、国の最も重要な拝所であった。

首里城正殿　国王自らが執り行う政治や儀式の中心だった建物で、中国の宮殿建築と日本の建築様式を基本に琉球独自の意匠に仕上がっている。

●分科会Ｋ　うちなーで昇華した中国建築

１日目　12 月 8 日（土）15:30 ～　／　識名園（那覇市）

担　当：島田　武

■講　　師：相川　和郎氏　（那覇まちま～いガイド）

■参加人数：10 名

■内　　容：

識名園（しきなえん）は、1799 年に琉球王家の別荘としてつくられ、王家の保養や中国からの使者を迎えるのに利用されていました。1941 年、国の名勝に指定され、2000 年には国の特別名勝に指定されました。さらに同年 12 月に世界文化遺産に登録されています。約 42 平方メートルの園内は、池のまわりを歩きながらいろいろな景色を楽しむようにつくられています。

識名園に到着後、「那覇まちま～いガイド」の相川氏が出迎えてくれました。入口で写真撮影をした後、入園しました。日本式庭園をベースに、中国風の六角堂や琉球石灰岩のアーチ橋など中国様式を取り入れた琉球ならではの庭園を見学しました。相川氏からは、重要ポイントを絞り込んで案内が行われました。

案内中には建物様式や琉球庭園に対するこだわり、背景にある理由などが丁寧に説明され、参加者の皆さんも、より興味関心が湧いたようでした。また、琉球時代の歴史や他国との関係など、当時の人々の生活習慣などを感じることが出来、大変興味深い時間を過ごせました。相川氏の熱心な案内と、参加者の好奇心が交わり素敵な分科会となりました。

●懇親会

1 日目　12 月 8 日（土）19:30 ～　／　サザンビーチホテル＆リゾート「コーラルグランデ」

司　会：山田　拓、小池　夏姫

1. 歓迎の舞	琉球舞踊「かぎやで風」	
2. 開会の言葉	第 28 回全国大会沖縄大会実行委員長	青木　剛志
3. 乾杯の挨拶	第 5 回日本青年海外派遣（南米） 沖縄県 IYEO 顧問	玉城　祐春
4. 御歓談		
5. エイサー演舞	分科会 B 参加者と前田エイサーのみなさん	
6. 空手演武	第 14 回「青年の船」参加、 第 2 回「国際青年育成交流」事業ヨルダン派遣団長 沖縄県 IYEO 顧問	金城　常雄
7. ベストドレッサーコンテスト		
8. 次回全国大会三重大会 PR		
9. 参加者交流会の御案内		
10. 閉会の言葉	司会	

IYEO

IYEO

青少年国際交流事業事後活動推進大会
日本青年国際交流機構第28回全国大会
第19回青少年国際交流全国フォーラム
沖縄大会
平成24年12月8日(土)～9日(日)
IYEO

IYEO

沖縄大会
平成24年12月8日(土)～9日(日)
IYEO

●全国物産展

1 日目　12 月 8 日（土）19:30 ～　／　サザンビーチホテル＆リゾート「コーラルグランデ」

担　当：渡嘉敷　信一郎

■提供物品数：86 件 （延べ 225 点）
■売 上 金 額：93，630 円
■使 途 内 訳：50，000 円（IYEO 東日本大震災復興支援募金寄付）
　　43，630 円（全国大会運営資金）

会場にて寄贈品を受け付けたところ、参加した皆様から全国各地の様々な品をお預かりしました。木箱に入った立派なお酒やご当地セット、またはタワシ等のユニークな品物まで、多様な品々を100種ほど受け付けました。

懇親会で会場の後方にて販売しましたが、多くの方々が見に来て下さいました。品物について、いろいろ質問して下さる方とコミュニケーションをとりながら、楽しく販売することが出来ました。一方、多くの品々を限られた時間内で販売することが出来るか心配でしたが、山口県IYEOの中野様が終始軽妙なトークで参加者の注意を惹き付けて下さり、販売に多大な協力をして下さりました。また、終了間際には参加者と交渉して複数の品をセットで販売して下さり、お陰で懇親会中に完売することが出来ました。購入された参加者・我々販売担当とも嬉しい気持ちで終えることが出来ました。なお、品物の金額は寄贈された方の希望額でしたが、購入された方の中にはお釣りを寄付して下さる方もおり、とても温かい気持ちになりました。お陰で楽しく販売を頑張ることが出来ました。

●参加者交流会

1 日目　12 月 8 日（土）22:00 ～　／　首里天楼別邸（糸満市）

担　当：平田　沙織、赤嶺　弓絵

大いに盛り上がった懇親会の熱気そのままに多くの方が交流会へと参加してくれました。沖縄の雰囲気たっぷりの 2 次会会場は参加者の皆さんにとても好評で、沖縄泡盛を片手に参加者の皆さんが色々な語り合いを楽しんでおられた姿がとても印象的でした。

また、2 次会のミニアトラクションとしてジャンケン大会を催し、豪華景品をめぐっての熱いジャンケンの戦いが数多く繰り広げられ、とても楽しい時間となりました。

■良かった点：

・大勢の方が参加していただけました。

・会場がホテルの外にあり、懇親会からのスムーズな移動が懸念されましたが特に大きな混乱も無くスムーズに移動することができました。

・全員で参加するジャンケン大会を行ったことで参加者の一体感がより強まったように思いますう。また、2 次会でのイベントをジャンケン大会だけにすることによって参加者同士の交流時間を多く作れました。

■反省点：

・2 次会参加希望受付は大会の受付時に事前に行っていましたが、懇親会後に、「やはり 2 次会にも参加したい」と、後から申し込まれる方もいて、参加者の把握・コントロールに苦戦しました。

●表彰式

2 日目　12 月 9 日（日）9:00 ～　／　サザンビーチホテル＆リゾート「コーラルグランデ」

平成 24 年度　表彰者

	所属	氏名	参加事業他
1	埼玉県	寺下　英明	第 4 回青年の船(1970) 第 2 回東南アジア青年の船(1975) 第 6 回国際青年育成交流（1999）タイ団長、第 10 回（2003)トルコ団長 第 24 回日本・中国青年親善交流（2002）団長
2	東京都	奥野　照義	第 1 回青年の船(1967) 第 11 回青年の船（1977） 第 31 回日本青年海外派遣(1989)オセアニア団長
3	大分県	大谷　直義	第 12 回青年の船(1978)
4	沖縄県	玉城　佑春	第 5 回日本青年海外派遣（南米）（1963）
5	宮城県	佐伯　洋昌	第 1 回青年の船（1967） 第 9 回青年の船（1975）班長
6	福岡県	藤永　郁智	第 18 回青年の船（1984）
7	大分県	星子　英子	第 10 回日本青年海外派遣（北欧）（1968）
8	沖縄県	知念　正	第 13 回青年の船（1979） 第 20 回青年の船（1986）班長

IYEO 表彰は、平成 16 年 2 月 29 日に制定された日本青年国際交流機構規約第 20 条の規定及び IYEO 表彰規定に基づいて行われています。

都道府県青年国際交流機構の会員又は IYEO に長年にわたり継続して協力してくださった方、もしくは団体で、以下の活動項目に当てはまり模範となる活動及び行為をされてきた方が表彰者として選ばれています。

① 地域の国際化及び活性化に資する活動
② 国際交流及び国際協力に資する活動
③ 青少年及び次世代の育成に資する活動
④ 日本青年国際交流機構の組織活性化に資する運動
⑤ 幹事会が認めた内容の活動

また、対象となる活動を 2 年以上継続して行われているか、短期間に大きく貢献したことも外部的評価によって明らかであることを条件としています。

●帰国報告

2 日目　12 月 9 日（日）9:30 ～　／　サザンビーチホテル＆リゾート「コーラルグランデ」

担　当：山田　拓、小池　夏姫

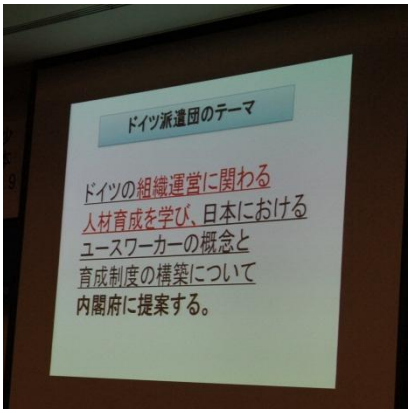
■報告者：金城　円（沖縄県青年国際交流機構）
平成 24 年度第 11 回「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」（青少年分野）

■派遣国：ドイツ共和国

■内　容：

個人としての発表ではなく団全体として、ドイツ派遣で学んできたことやドイツにおけるユースワーカーの概念などを発表させていただきました。内容としては、日本における青少年育成に関わる職種なども事例として現状をお伝えしました。

また、日本における現状と課題をふまえて、ドイツから学んできたことを、私達がどのように現場でいかしていくべきか、また私達自身が目指す青少年育成のあり方と未来を発表の中で描きました。その中で、ドイツで得てきた学びを日本でユースワーカーとして育成するには、自ら考えること、関係性が築けること、意識を高く持つこと。 専門性を身につけることなどが挙げられました。最後に、今後私自身が沖縄で実践する小さな一歩について提案をさせていただきました。



●事後活動紹介　自然学校の震災支援から IYEO のこれからを考える

2 日目　12 月 9 日（日）9:45 ～　／　サザンビーチホテル＆リゾート「コーラルグランデ」

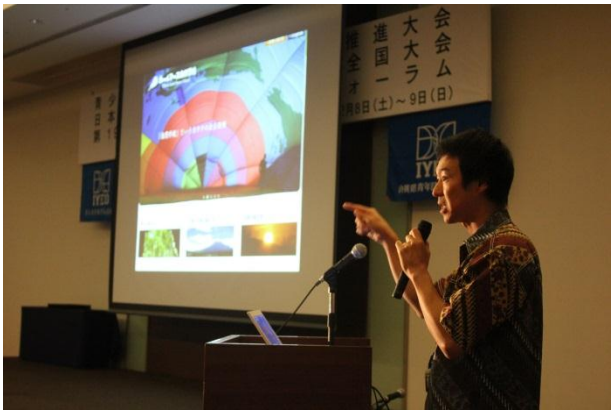
担　当：山田　拓、小池　夏姫

■報 告 者：田中　啓介（東京都青年国際交流機構）
■参加事業：平成 16 年度　第 17 回「世界青年の船」事業既参加青年
■所　　属：NPO 法人ホールアース自然学校
■内　　容

ホールアース自然学校の震災支援のお話をされました。ホールアース自然学校に福島出身のスタッフがいたことから、福島県いわき市の NPO 団体と森づくり事業を行ったとのことでした。

具体的には、第一期の直接支援時期では、スタッフを断続的に現地に派遣し、様々なカウンターパートとのつながりを広げながら、煉瓦等の撤去作業、住民へのニーズ聞き取り調査を行い、第二期の間接支援時期には、機会と情報の提供に主眼を置き、自然体験キャンプや、都内での農産品・特産品販売、ワークショップを実施したことなどを説明されました。

最後に、第三期は「復興」にどう貢献できるか、どう共に歩むのか。これからの活動から、IYEO のこれからを考えるキーワードがあるとすれば何なのか…。復興について考えるきっかけを、大会参加者に与えていました。



●事後活動紹介　J-SSEAYP

自主活動サポート助成制度（チャレンジファンド）対象事業

2 日目　12 月 9 日（日）10：00 ～　／　サザンビーチホテル＆リゾート「コーラルグランデ」

担　当：山田　拓、小池　夏姫

■報 告 者：溝口　寛子 （福岡県 IYEO）
　　小池　夏姫 （沖縄県青年国際交流機構）

■参加事業：平成 24 年度　第 38 回「東南アジア青年の船」事業

■内　　容：

船上での ASEAN 各国の参加青年とディスカッションや文化交流を通して、大きな気づきと絆を得ることができました。更にこの気づきをより多くの人に感じて欲しいという思いから、第 38 回「東南アジア青年の船」事業既参加青年による『J-SSEAYP』というプログラムを事後活動として企画・運営しました。

このプログラムの狙いは「東南アジアの文化の多様性に気づき、理解を深めること」であり、日本の若者と東南アジアとの隔たりを小さくすることです。国際交流に関心のある日本の若者を対象に、東南アジアの青年たちとの少人数でのワークショップや、文化体験、ディスカッションを含む、宿泊型の活動を都内で行った報告をしました。

●事後活動紹介 大分県障害福祉青年フォーラム

2 日目　12 月 9 日（日）10：15 ～　／　サザンビーチホテル＆リゾート「コーラルグランデ」

担　当：山田　拓、小池　夏姫

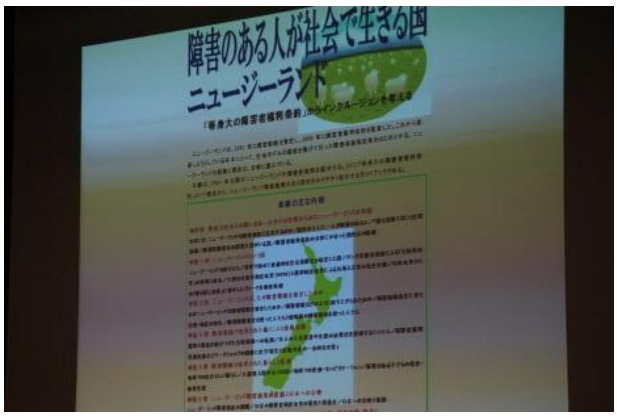
■報 告 者：横山　由季 （広島県 IYEO）
■参加事業：平成 23 年度　第 10 回「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」（障害者分野）
■所　　属：広島市立広島特別支援学校
■内　　容

広島県IYEO横山由季さんに事後活動について発表をしていただきました。横山さんは、昨年 2011 年に「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」事業に参加し、障害者分野でニュージーランドへ派遣されました。派遣後、事業参加の経験を生かして活動したいと考え、「障害福祉青年フォーラム」を実施されました。

フォーラムでは、障害の有無に関わらず、必要な支援が受けられる社会、「インクルーシブ社会」の事例紹介を行いました。次世代のリーダー像として、参加型の講演を実施し、さらに異職種間での意見交換がなされ、繋がりを広げることができ、本フォーラムの目的が達成されたプログラムとなりました。また、閉会式の行動宣言では、参加者のつながりをネットワークとして機能させていくことを誓いました。

このフォーラムを通して、ニュージーランドと比較して日本の障害福祉が劣っているということではなく、今後の日本、あるいは地域社会を考える際に参考になる学びの共有、また、日常的な生活や業務に生かせる気づきが得られました。

「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」事業に参加できたことも、思いもよらない貴重な体験でしたが、事業終了後に「障害福祉青年フォーラム」の開催や、本の出版などの活動できることが夢のようです。私たちの活動が少しずつ、他分野で活躍されている方々に知っていただき、分野を問わず繋がりができれば幸いです。



●閉会式

2 日目　12 月 9 日（日）10：45 ～　／　サザンビーチホテル＆リゾート「コーラルグランデ」

担　当：山田　拓、小池　夏姫　／　司　会：宮里　幸子

1. 開会の言葉	沖縄県青年国際交流機構会長	上江洲　利奈
2. 挨　　拶	内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室長	伊奈川　秀和
	日本青年国際交流機構副会長	上杉　聖次
3. 次回開催県挨拶	三重県青年国際交流機構会長	廣田　知加子
4. 閉式の言葉	第 28 回全国大会沖縄大会実行委員長	青木　剛志

●地域理解研修　本島北部視察コース　～オリオンビール工場見学

2 日目　12 月 9 日（日）11：30 ～　／　オリオンビール株式会社　名護工場（名護市）

担　当：豊川　博史、渡嘉敷　信一郎

■講　　師：豊川　博史　氏（平成 12 年度日韓青年親善交流事業気参加青年）

■参加人数：40 名

■内　　容：

新鮮なオリオンビールを飲みに行くぞー！という参加者共通の(！？)目的達成のため、大会会場から約80km 北にあるオリオンビール名護工場まで行ってきました。ところで、「オリオンビール」の名前の由来って何だか分かりますか？答えは勿論、星座のオリオン座が由来です。ただ、これは一般公募によるもので、選定理由は、「オリオン座は南の星であり、沖縄のイメージにマッチしている」「星は人々の夢や憧れを象徴する」等だったそうです。今となっては全国区の企業となり、まさに“南の星”となりました。

工場に入るとオリオンビールの歴史が見学者用に展示されていて、上記名前の由来など私たちうちなーんちゅ(沖縄の人)も知らない意外な事実を知ることが出来ました。暫くすると担当者が案内して下さり、ビールの材料である麦芽の製造過程での変化や香りを確かめ、発酵場所などを見学しました。休日のため残念ながら製造ラインは稼働していませんでしたが、稼働中に撮影された、高速で回転する缶のスロー映像を見て一同歓声をあげていました。工場見学の後は、お楽しみのビールの試飲。工場で飲むビールは、やはり新鮮で美味しかった！移動の関係上、試飲の時間が15分ほどしかありませんでしたが、参加者の皆さんはそれぞれのテーブルで楽しく話に花を咲かせていました。

●地域理解研修　本島中部視察コース　～県民生活と基地

2 日目　12 月 9 日（日）11：30 ～　／　嘉数高台公園（宜野湾市）、嘉手納道の駅（嘉手納町）

担　当：古謝　由紀子、島田　武、真栄田　双祐

■講　　師：木村　ゆきの　氏（他、平和ボランティアガイド 2 名）
■参加人数：40 名
■視 察 地：

最初にバスで国道 58 号線沿いの基地等を見ながら北上し宜野湾市嘉数公園展望台を目指しました。バス内では研修の資料を配布し、沖縄民謡の音楽を BGM に到着までの間、沖縄郷土料理の弁当を頂き、通り過ぎるお店や基地の説明を挟み約 1 時間のバス移動時間を楽しみました。

嘉数高台公園到着後には、バスを近くに停車してみんなで一気に 3 名の平和ボランティアガイドさんが待っている高台まで歩きました。初めにガイドさんから普天間基地の基礎概要などの詳細など基礎知識がクイズ形式なども交えて楽しく学ぶことが出来ました。また、3 名とも沖縄国際大学で学んでいる学生の立場、また普天間基地近くに住んでいる住民の立場を踏まえて、体験に基づく実際に捉えている問題を直接伺える機会だということで参加者からも沢山の質問が出て、日頃テレビ等からの一方通行な情報ではなく、双方向な意見交換ができ素晴らしい時間を過ごすことができました。

次に嘉数高台公園を後にして、最後の視察地である道の駅かでなの展望台へ向かいました。今回も国道 58 号線を通り、普天間基地、フォスター基地、嘉手納基地をバスから見て簡単な説明なども入れながら走りました。

道の駅かでなに到着すると展望台へ移動し、嘉手納基地を一望しながら基礎概要と簡単な豆知識や体験等についてお話しました。ここでは、普天間基地を背景に全員での集合写真も撮影しました。また、建物には資料館があり、騒音の体験などや映像での説明などがされたことで、嘉手納基地について深く学ぶことができました。

●地域理解研修　那覇市内散策①　～国際通りと牧志公設市場

2 日目　12 月 9 日（日）11：30 ～　／　国際通り、牧志公設市場（那覇市）

担　当：山田　拓

■講　　師：礒部　芳子　氏（那覇市まちま～いガイド）

■参加人数：7 名

■内　　容：

ホテルからの出発に大幅な遅れがあり、散策コースに少し変更がありました。

国際通り入口に到着後、牧志第一公設市場まで徒歩で移動しました。市場内を見学し、ちょうど昼食時ということもあり、軽食を取ることができました。その後、市場の裏通りや商店を巡り、その所縁についてガイドの礒部氏の説明を受けました。

短時間のコースではありましたが、移動中の車内で自己紹介ゲームなどをしたことで参加者同士が打ち解け、散策中も和気あいあいとした良い雰囲気でした。

普段歩きなれている国際通りでも、参加者と同じ立場になって散策することで新たな発見や気づきがあり、改めて郷土の面白さが感じられるコースでした。また、ホテル出発時間の遅れや、参加者のフライト時間の未確認など、反省すべき点が多くあり、運営側としても学ぶべきことの多い内容でした。

●地域理解研修　那覇市内散策②　～壷屋のツボ

2 日目　12 月 9 日（日）11：30 ～　／　壷屋やちむん通り（那覇市）

担　当：具志堅　広子

■講　　師：玉城　国男　氏（那覇市まちま～いガイド）

■参加人数：10 名

■内　　容：

はじめに「まちまーい」とは、沖縄語で「まちを散策する。散歩する。」という意味です。今回参加者のみなさんと、那覇まちまーいの金城さんと一緒に壺屋焼きで有名な壺屋を散策しました。

本大会終了後、バスに乗り糸満市から那覇市へ。バスを降り、那覇市立壺屋焼物博物館前にて那覇まちまーいの金城さんをお待ちしながら、飲み物とターナファークルーという沖縄のお菓子を食べてヤーサノーシ（ちょっとした腹ごしらえ）をしました。その後金城さんと合流し、壺屋の入口で説明を受け、いざ壺屋まちまーいへ。

最初に訪れたのは、北の宮（ニシヌメー）です。ここは、壺屋の拝所の一つで、ニシとは方言で北のことを指します。昔は、この地にニシヌ窯と呼ばれる登り窯がありましたが、大正7年に窯をくずして大和風のお宮が作られました。そこに土地の守り神である土帝君（トーティークン）と、焼物の神様がまつられ、北の宮（ニシヌメー）と名付けられたそうです。

昔は陶工やその家族が拝んでいましたが、現在では焼物の関係者だけでなく、壺屋地域の発展、健康祈願などの目的で拝む人々もいるとのこと。

次に訪れたのは、沖縄県指定文化財の「南窯（ふぇーぬかま）」です。壺屋にただ一つ残った荒焼の登り窯で、琉球王府が全島各地から窯を集め統合した際に、王府が作って与えたものだそうです。隣にあった「北ヌ窯」に対して南に位置していたことから、「フェー（南）ヌ窯」と呼ばれています。

その後、沖縄の昔の骨壷である厨子甕を見ながらいしまち通りを抜け、昔ながらの赤瓦の屋根をした焼物工房や、シーサーを見ました。その後やちむん通りに戻り、集合写真撮影を行いました。国際通り散策班と空港移動組みに分かれての解散となりました。

●空港送迎バス

担　当:　古謝　裕之、二木　良平、池原　善美

■運行スケジュール

平成 24 年 12 月 8 日(土)　那覇空港⇒ホテル　①11:50　②12:40　③13:30 (全 3 便)

平成 24 年 12 月 9 日(日)　ホテル⇒那覇空港　①12:00　②12:50　(全 2 便)

■利用料金:　片道 500 円／1人

■利用者数:　2 日間合計 107 名(延べ人数)

今回のバス送迎で良かったこととして、バスの乗車時間をすでに定めていて、参加者もその時刻を知ったうえで受付をしていたので、そこまでバタバタすることはありませんでした。

大会当初はバス送迎係の人数は 2 人で、1 人がバス周辺で待機、もう 1 人が空港出口から出てくる参加者をバスのところへ誘導する係に分けていました。

事前に送付した大会案内資料にバス乗り場への地図を載せていたので、到着口を出たあとの空港出口で待機していれば大丈夫と思っていたのですが、全日空(ANA)と日本航空(JAL)で別々の到着口があること、また参加者が到着口で待っていて、中々空港出口まで出てこないという問題が生じました。

バス送迎係に割り振れる人数が少なかったとはいえ、各航空の到着口で参加者をお迎えする配慮ができなかったことは反省点です。急遽、もう 1 人、送迎係りを手配し、1 人が JAL 到着口、もう 1 人が ANA 到着口に待機することで、それ以降は無事に参加者をバスへ誘導することができました。

●有料託児保育　ゆいキッズ

担　当:　具志堅　広子

■依 頼 先:「保育サポーターゆい kids」

■連 絡 先:　090-6864-2209

■H　　P:　http://www.okinawajosei.org/

http://volunchu.net/?q=node/42

■利用料金:　1,000 円／1 時間 (保育サポーター交通費込み)

■利用状況:

日付	時間	場所	利用人数	保育サポーター人数
12/8 (土)	8:30～11:30 (3H)	キッズルーム (サザンビーチホテル内)	2 名	2 名
12/8 (土)	13:00～19:00 (6H) 14:00～18:30 (4.5H)	キッズルーム (サザンビーチホテル内)	2 名	2 名
12/9 (日)	9:30～11:00 (1.5H)	キッズルーム (サザンビーチホテル内)	1 名	1 名

■特記事項:

＊お子様お預かりの際には、お着替え・おむつ・ミルク(乳児)・おてふき用タオル・おやつ(幼児)・汚れもの入れ・飲み物などのお出かけ一式の準備。

＊当日に体温を測っていただくため、体温計を持参。

＊会議室などでの託児の場合、敷物をゆい kids さんから借用(無料)

■担当者所感:

本大会前日の代表者会議の時間帯から託児保育を開始しました。ゆい Kids の保育士さんは、優しい方ばかりで、お預かりしたお子様方もすぐに保育士さんと仲良くなっていました。おもちゃや敷物などもゆい Kids さんに持参していただいたので、とても助かりました。

本大会中はサザンビーチホテル＆リゾート内のキッズルームにて託児を行った。キッズルームがあることで、場所も安心してお預かりすることができました。

今回託児でお預かりしたお子様がお二人で、保育士さんもお二人来ていただけたので一対一での対応ができ、とても充実した保育環境を提供できました。

利用したお母さんからは、「託児があってとても助かった。もし託児がなかったらどうしようか困っていたと思う。」との声をいただきました。小さいお子様がいても大会に参加できるよう、今後も工夫していただけたらと思います。また、保育カードの送信が遅くなってしまいましたが、できるだけ早くお預けする方に送れると、事前に記入していただけてよかったと思います。

●大会報道

沖縄タイムス掲載 （平成 24 年 12 月 14 日）

「言葉通し沖縄理解を」

比嘉さん 差別・偏見の歴史語る

糸満で青年交流全国大会

【糸満】内閣府の青年国際交流事業の参加経験者らでつくる日本青年国際交流機構の第28回全国大会が8、9日、市内のホテルで開かれた。県外からの約200人を含む230人が参加。初日は唄三線者で、ウチナーグチ（沖縄語）講師の比嘉光龍（ふぃじゃ・ばいろん）さんの基調講演や11の分科会で、沖縄の歴史や文化に触れた。

青少年国際交流事業事後活動推進大会、第19回青少年国際交流全国フォーラムの沖縄大会を兼ね、内閣府や同機構などが主催した。

比嘉さんは、社会貢献のためには、社会的弱者を知ることが大切と訴えた。子どもや高齢者も社会的弱者であることを考えれば、誰もが身近な存在であるはずと指摘し、その上でウチナーグチや沖縄のことを考えてほしいと呼び掛けた。

2009年に国連教育科学文化機関（ユネスコ）が、琉球諸島には六つの言語があると発表したことを報告。一方で、沖縄語はこれまで差別や偏見、撲滅の危機にさらされてきたことを説明し、琉球王国が独立していた歴史的経緯から、沖縄の言葉は「方言のはずはない」と強調した。

さらに、沖縄語について、米国・ハワイやイギリス連邦・ウェールズのような欧米型の言語復興を目指したいと目標を掲げた。国際貢献で世界に目を向けるだけでなく「日本が多言語・多文化であることは素晴らしいこと。日本の社会の中で、救いを求めている人にも思いをはせてほしい」と述べた。

分科会では、ゆし豆腐や伝統工芸作り、エイサーや空手体験などで、沖縄への理解を深めた。

比嘉光龍さん

比嘉光龍さんの講演に聞き入る参加者ら＝糸満市内のホテル